

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH WEEKLY



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：山田 安隆 幹事：大村 精二

会報委員長：清水 忠

1974・9月5日

第23号

ラバウル捕虜収容所の回想



山岸製作所社長 山岸 与作

昭和20年終戦の年の暮、私はトラック島から日本へ帰還する前夜に、戦犯として米軍に捕えられラバウルへ送られた。

旧軍人として原住民を虐待したという容疑であった。幸い、私は奇蹟的に助かったが、罪なくしてラバウルの刑場の露と消えた同僚も幾人かいた。人間の生殺与奪すべてが、自己の意思によらない悲惨な時代であった。

30年前の遠い日、こういった痛ましい犠牲のあったことを、もはや太平の日本人は忘れようとしていないだろうか。

しかし、こういった数々の犠牲の上にこそ、今日の日本の繁栄がもたらされたことは間違いない。そして、その担手が大正生れであることも否定できない。

明治の気骨、大正の哀愁、昭和の英知とよく云われるが、大正の心意気を、私は大正世代の一員として、胸を張って誇りたいと思う。

—金沢北RC例会卓話より— (文責 清水 忠)



卯辰山碑林散歩 (5)

— 桜井梅室句碑 —

卯辰山の中腹宝泉寺は、金沢の家並を一望できる景勝の地にある。その景勝を望む所に桜井梅室の碑が二基建っている。

「ひと雫 今日命ぞ 菊の露」

「屋の棟に そふて殖けり 梅柳」

書によれば、

「梅室は金沢の人なり。俳道に遊び、蒼虬らと共に天保の四老人と称せられる。

嘉永5年京都に没す。享年84。」とある。

私の名刺

由井 賢一



大正10年高岡市に生れ、当時父が警察官であったので県下各地を転々。私が小学校入学に当り子供の学校のことを考えての親心？から退官、市役所入りし、高岡市に永住することになる。

私が高岡商業4年の時父が死亡いたしましたので進学を諦め、海外雄飛を志すには商事会社がよいと思い卒業と同時に三井物産(株)に入社、名古屋支店勤務貿易関係の仕事に従事。昭和17年現役入営。満洲、中支と転戦、中支零陵にて終戦。翌年6月復員し三井物産に復職するもG.H.Qの指令により財閥解体を命ぜられ解散の憂目に会う。昭和29年北陸日野自動車(株)に入社(日野自動車の北陸四県下代理店)。昭和42年10月金沢支店を分離独立、石川日野自動車(株)を設立

し現在に至ります。自動車公害云々ときらわれもしますが、公共的性格の人員輸送のバス、貨物、総輸送量の90%以上を運ぶトラック、暮しに直結する物流の担い手であるディーゼル車のバス・トラックの販売サービスを通じ県民の皆さんに豊かな生活を運ぶ一翼を担っており、今後ロータリアンの信条を体得し、自動車を通じ社会に寄与したいと念じております。よろしくご指導をお願い申し上げます。

妻47才、長男24才、長女20才の4人家族です。趣味は健康本位のゴルフ。

山田 安隆



私は明治42年の生れで、いつの間にか年寄りの仲間に入って現代の若い人達から頭の廻転がおそい、考え方がふるい、封建的であると言われる年齢になってしまった。農家の息子に生れ幼い時から背丈が高く人一倍の腕白餓鬼大将で両親を心配させたものである。父は蓮根作りで現在の浅ノ川病院のある処で蓮根を作っていたので私も手伝いに出た事もあるが、重労働なるがためか若くして父が死亡し、私も脊髄カリエスにおかされ、永年の闘病生活を余儀なくされ、自分を捨てた事もあるが無我の境に入るべく魚釣りや日光にあて病気を直した経験も、よき人生の修養の場でもあったと喜んで居る。昭和16年すゝめられるまゝに若輩30才にて小坂産業組合の組合

長に就任したのが現在まで農業団体から手を引く事が出来ない人生となって居る。父の50年忌も昨年すまし孫も3人育っている身で果して現職として活動しているのが好いのか悪いのか自分でわからない今日この頃でもある。職場関係は、県指導連副会長をはじめ県信用連副会長、経済連副会長或は県中央会会長の要職を務めました。特に思い出の深いのは今はなき田谷知事の初めての選挙に総指揮を務め農家の政治力を結集した選挙で、今にして無理なことが通じたと苦笑いをして居る。

ロータリーは昭和32年県中央会時代に金沢ロータリークラブに入会し、始めて各界の人達と知り合う機会を得た事を喜んで居る。金沢東クラブが創立されチャーターメンバーとなり今田居住地に北クラブが創立され再移籍を余儀なくされ、メンバー全員の友愛を柱に四つのテストを前むきに前進を続けて居る現在である。家族は長男淳は金沢西ロータリークラブから移籍し当クラブのメンバーであります。次男はタヂカ運輸(株)の社長、三男は北国紙器に務めております。

寓 話 (其の二)

玄門寺・如来寺住職 吉田 昭 炳

むかし、ある森に兎と猿と狐が仲よく住んで居りました。

ある日、顎にまっしろな髭をはやし、手に錫杖を持ち、綺麗な目をした何とも云えぬ上品な、清楚な感じを与える老人が森の動物たちに

「私はこの森を通り抜け、向うに見える村まで行こうと思っていたが、途中道に迷い、昨日から一滴の水も飲まず、食事もしていない。何んでも宜いから食べ物をめぐんで欲しい」と疲れ切った声で頼むのだが動物たちは、しらぬ顔をして自分たちの食べ物だけを探し続けている。

そんなとき、兎が老人の切ない声を耳にしたので、何時も仲よくしている猿と狐に相談したところ三人力を合わせて老人を助けることになった。

猿は早速すると木に登り、おいしそうな果物を籠に一杯取って来るし、狐は川に行き、活のよい魚をピクに一杯取って来た。

しかし兎は猿や狐のようにそんな上手に食べ物を調達することが出来ず、ただ自分の不甲斐なさを悲しく思っていた。

老人は飢えと寒さから身を守るためその辺の木をかき集め、たき火を焚いていた。

兎はいろいろ考えたあげく、意を決して老人の処に行き、

「私は猿や狐のようにあなたの食べ物を調達することは出来ませんから、せめて此の私の身体を食べて頂きたい」と云うやいなや、自ら火の中に身を投じ、死んでいった。

老人（帝釈天）は身を犠牲にしてまでも他人に尽そうとした兎の一途な気持を永く賞め讃えるため兎を月の世界に連れて行ったので満月の夜には必ずあの兎の姿が見えるのですと云う話をするとなる程と思う人と、そんな馬鹿な……と思う人がいる。

テレビは吾々に居ながらにして月世界の様相を見せ、兎が一匹もないことを実証して呉れた。月世界は万目荒寥、ただ有るものは瓦礫と声なき無生物のみ。ロマンや善意の住み付く余地の全然ない死の世界であったことは万人承知のことです。

しかし私は「超我の奉仕」の精神に生きた兎が何時までも月に住んで居り、皆んなから賞讃されるような気が解って貰える世の中が望ましいと思う一人です。

金と物と集団のエゴのみが先行する世の中は、み、ずのように胴欲そのものであり、その姿は余りにもみにくく、不体裁です。

金魚のように外面は如何に綺麗で、立派で、人に珍重されようとも、名誉欲、権勢欲、その他いろいろの欲望のしっぽが切れないため、あの黒いうす汚いお玉じゃくしよりも不自由な、みじめな生活を送らなければならないのです。

お玉じゃくしはしっぽが切れることにより、手や足が出、最後には蛙となって水や丘で自由な生活ができるように、吾々は時宜を得たしっぽの切り方を身につけ、もっと自由人になるべきである。

瞑想する印度人は雷はダーダと鳴る、つまり広く施す（ダーナ）、自ら戒める（ダミヤティ）の二つの頭文字をとってそのように鳴るものと信じている。

雷鳴を聞く度に広く施したか、自ら戒めたかと深く反省する心情は見上げたものです。

吾々は雷鳴がゴロゴロでなくダーダと聞こえるようになり、月を眺めては「超我の奉仕者」兎を賞讃できるような気持になれば、やっとならぬロータリアンの仲間入り出来るのだろう。

中秋の名月を間近に控えている此頃です。月を賞で、兎を讃える夜の例会を提唱する所以も宜なる哉。

